



楓の誉

R4.5.30(第2号)
文責: 瀬上 佳宏

気づき、考え、行動する

熊本地震から六年が経ちました。平成二十八年四月十四日(前震)と十六日(本震)の二回の大きな揺れに見舞われ、益城町や熊本市東部地域は、特に甚大な被害を受けたことは、皆様もご記憶にあると思います。この地域の小・中学校や高校で、校舎や体育館が持ち堪えた学校は、そのほとんどが被災住民の避難所となりました。そして、これらの学校では、避難所の運営と学校再開に向けた業務の両方を行わなければならなくなりました。

先月の学校便りにも書いたように、当時、私は、県教委のいじめ防止対策班の班長でしたが、避難所となった学校を支援するため、一旦、班の業務は凍結し、緊急に県教委内に召集することになった「学校支援PT」のチームリーダーを務めることになりました。そこで経験したことは、一生、私の記憶から消えることではないと思っています。ただ、そのことをここに書き出せば、紙面が全く足りないのです、私が現場で目にした、避難所の手伝いや瓦礫の片付け等のボランティア活動を行った中高生の姿にだけ、触れたいと思います。

その生徒らを見て思ったことを一言で表せば、それは「主体的」です。言われて行動するのではなく、自分で「気づき、考え、行動」しようとしていました。そして、おそらくその生徒たちは活動を通して、他者への思いやりや優しさ、いのちの大切さなどをおのずと学び

取っていたのではないかと思えます。

それでは、生徒が人間として成長するには災害が必要なのか……。そんなことはありません。学校生活の中に自ら「気づき、考え、行動する」場面はたくさんあります。「体育大会」「集団宿泊教室」「修学旅行」等の学校行事や委員会を中心とした生徒会活動等は、その要素に溢れていると思っています。

二十一日(土)に開催した本校の体育大会は、本校の歴史に残る実に感動的な行事となりました。多くの保護者の皆様に、実際にご覧いただきましたし、本校HPにも記事を載せていますので、改めて一つ一つを紹介はしません。私が大会全体を通じて何に感動したのか……。そうです。まさしく生徒たちが「主体的」であったということ。言い換えるのなら、高橋 教頭が講評で述べたように、体育大会の練習や本番を通して、一人一人が「気づき、考え、行動した」こと、その一つ一つが生徒たちの人生にとってかけがえのない財産になったと信じています。



体育大会の閉会式から

「気づき、考え、行動する」は、青少年赤字(JRC)の態度目標にも掲げられており、変化の激しいこれからの社会を生きるために、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力をバランスよく育てること、すなわち「生きる力」の育成を唱った学習指導要領の教育方針そのものでもあります。今回の体育大会を確かな足掛かりに、「夢と誇りを持ち、自分らしく主体的に行動できる生徒の育成」にさらに挑戦していきたいと思ったところです。

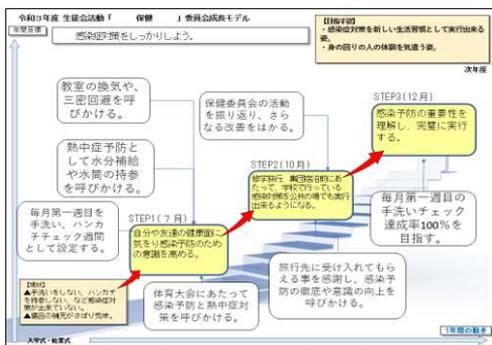
第一回 生徒総会を終えて

先週(二十七日)の六・七校時、体育館において、本校初の生徒総会を行いました。議題は、「生徒会執行部の活動計画」と「各委員会の活動計画」の二議案でした。

生徒会役員や各委員長からは、年間計画の提示前に、「成長モデル」についての説明がありました。「成長モデル」とは、執行部や各委員会としての課題を明確にし、それらが解決・改善した姿として「目指す姿」を掲げます。そして、解決・改善のための方策にステップを設け、段階的に取り組んでいくものです。

実は、この「成長モデル」は、小学校の不安研究部長(主幹教諭)を中心に、合志楓の森小・中合同で進めている校内研究の中核となる考え方で、中学校区の教育目標「自他を大切に、自ら考え、自ら行動できる児童生徒」育成を具現化する一方策として行っています。

執行部や各委員会は、今回承認された活動計画に従い、活動していくこととなります。まずはしっかりと取り組み、その結果(成果)を確認・評価し、次年度の工夫・改善に活かす。つまりPlan→Do→Check→Actionのサイクルが大事です。その大事な第一歩を踏み出したという意味で、大成功かつ記念すべき生徒総会だったと思います。



成長モデルの一例(保健委員会)



学校HPのQRコード